

統合的な言語活動を通じたコミュニケーション能力の育成

高校教育研究会議

研究員 平山 歩 (川崎市立川崎高等学校) 倉持 裕子 (川崎市立川崎総合科学高等学校)

高橋 直樹 (川崎市立幸高等学校) 植村 利英子 (川崎市立橋高等学校)

石倉 知子 (川崎市立高津高等学校)

指導主事 半田 真規子 米倉 雅実 鬼頭 洋司

I 主題設定の理由

グローバル化が急速に進展する中、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされている。その能力の向上を目指し、現行学習指導要領に基づいて授業改善が図られてきた。しかし、文部科学省実施の英語力調査結果において、多くの授業で「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」のそれぞれの技能が別々に扱われ、「統合的な言語活動が十分ではない」ことが課題として挙げられている。実際のコミュニケーションでは、一つの技能だけでコミュニケーションが成り立つことはなく、「人の話を聞いて、そのことについて話し合う」「本を読んで、自分の意見を書いてまとめる」など、複数の技能が統合されてコミュニケーションが行われている。よって、実際のコミュニケーションを授業で疑似体験する統合的な言語活動が必要とされている。

さらに、新学習指導要領の外国語科の目標には、「外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」の育成を目指すとされており、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「話すこと（やり取り）（発表）」「書くこと」の4技能（5領域）の統合的な言語活動を中心に授業改善を進め、コミュニケーションを図る資質・能力の育成に結び付けていくことが求められている。

そこで本研究会議では、それぞれの学校の特色や生徒の実態に応じて、統合的な言語活動を取り入れた授業実践を単元全体で行い、その効果を考察していくこととした。

II 研究の内容

1 研究の方法

○コミュニケーションを図る資質・能力の育成を図るため、単元全体で統合的な言語活動を行う。

○研究の成果をより明確にするため、英語や英語の授業に対する生徒の意識を調査するアンケートを6月と12月の2回、各校で実施する。

2 各校における実践と成果

(1) 川崎高等学校全日制課程普通科2学年での実践

①生徒の実態

英語の授業では、ペア・グループ活動で積極的に自分の意見を述べようとする生徒が多い。6月実施のアンケートからは、「会話をする事」の重要性を感じながら、「発信すること」を苦手と感じていることがわかった。

- ・英語の学習は、これからの社会生活の中で役に立つと思いますか。
- ・英語でどのようなことができるようになりたいですか。
- ・英語で苦手だと思うことは何ですか。

図1 主なアンケート項目



図2 質問や提案をする様子

②実施した統合的な言語活動

○課題について書いた英文をグループで読み合い、それについて話し合う活動

⇒「書くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」の統合的な言語活動

③実践例

<科目、単元> 英語表現Ⅱ「論理的に意見を発信する」

<単元目標>

- ・課題について、論理的に意見を伝える。
- ・重要な定型表現や接続詞を効果的に活用する。

<授業展開（第7時）>

- ・導入：本時のねらい、他者の意見文について話し合い、添削を通して、自分の意見文の改善につなげることを確認する。
- ・展開：班員の意見文の添削と疑問点や新たな視点の提案を書き手の生徒へ伝える。
- ・まとめ：班員から提案された内容や、疑問点を個人で整理する。

<活動の様子・生徒の反応>

他者の意見文を読む活動を通して、読み手にわかりやすく表現することの重要性を理解する様子が見られた。また、書き手の主張を読み手にわかりやすく伝えるには、内容が論理的に構成されている必要があり、特に主張を支える具体例や事実の提示の重要性を理解する様子が見られた。

④成果

アンケート結果から、会話することが「とても苦手である」と答えた生徒の割合が32.0%から25.0%となった。これは、「書く」「読む」「話す（やり取り）」の統合的な言語活動を通して、主張する意見を分かりやすく発信するためには、具体例や事実提示が必要なことに気づき、相手を説得する意見を発信できる力が育成されたからと思われる。

（2）川崎総合科学高等学校全日課程情報工学科3学年での実践

①生徒の実態

アンケート結果から、会話やメールのやり取りをしたり、まとまりのある英文を書いたりすることができるようになりたいという意欲的な生徒がいる一方、英語に対して苦手意識をもっており、会話することに消極的な生徒もいることが分かった。また、将来社会に出て英語が必要だと答えている生徒もいた。

②実施した統合的な言語活動

○ペアになって話し、考えを広げ、それを基にして英文を書く活動

⇒「話すこと」「書くこと（やり取り）」の統合的な言語活動

○読んだ内容について、話し合う活動

⇒「読むこと」「話すこと（やり取り）」の統合的な言語活動

③実践例

<科目、単元> コミュニケーション英語Ⅱ 「旅行の英会話」

<単元目標>

表1 英語表現Ⅱ writingに関わる指導計画 ※【】内は統合的な言語活動

第1時	論理的に意見を発信することを理解する。 【聞く・話す(発表)】
第2時	論理的に意見を発信する。 【聞く・話す(やりとり)】
第3時	論理的に意見を発信し、他者の意見に対して同意したり、反論したりする。 【聞く・話す(やりとり)・書く】
第4時	ディスカッション活動で論理的に意見を伝え、他者の意見にも理解を示し、班員と協力して新たな提案をする。 【聞く・話す(やりとり)】
第5～7時 本時	社会的な課題に対し、論理的に意見を発信する。 【書く・読む・話す(やりとり)】
第8～9時	Five – paragraph essay を理解する。 【読む・書く】
第10～12時	Five – paragraph essay を書く。【書く・話す(やりとり)】



図3 帯活動をしている場面

- ・旅行で遭遇する日常生活と異なる様々な場面や状況の中で、コミュニケーションを続ける力を身に付けることで、日本を訪れた観光客にも英語で説明できるようにする。

<授業展開（第8時）>

- ・帯活動：日本の観光地について話し合い、アイデアを広げる。
- ・展開1：広げたアイデアから自分のおすすめの観光地について相手に説明する文章を書く。
- ・展開2：練習をした後、発表する。

<活動の様子・生徒の反応>

帯活動で話した内容から次のライティングの活動につなげることで、書くことが苦手な生徒も抵抗なく書く活動に取り組む様子が見られた。また、現実に近い場面や状況を設定することで、生徒たちは言語活動に意欲的に取り組み、観光地の説明や様々な場面での会話を自分なりに工夫して行うことができた。

表2 単元計画 ※【 】内は統合的言語活動

全時間	帯活動：ペアで会話活動
第1時	班で観光マップと英語の説明を結び付けるクイズに答える。 【話す（発表）・書く】
第2時	旅行に関連した英語をペアでできるだけたくさん書く。 どんなホテルに滞在したいか意見交換する。 【話す（やりとり）・書く】
第3時	ホテルの予約の仕方についての会話文を練習する。 自分の条件に合った部屋を予約できるようにする。
第4時	自分の家族がカナダからの生徒をホームステイさせるという条件で、できることについて話し合う。
第5時	ALTの故郷サンディエゴを例とし説明方法を確認する。
第6時	客に観光地を説明する英文を理解する。 役割を決め、スクリプトを見ないで会話する。
第7時	ファストフード店やレストランでの店員と入店から会計までの会話を続けられるようにする。【読む・話す（やりとり）】
第8時 本時	日本を訪れた外国人に日本の観光地について英語で説明できるようにする。 【話す（やり取り）・書く】

④成果

アンケート結果から、「とても苦手」と回答した生徒の割合が、「話すこと」の領域では28.6%から6.9%に、「読むこと」の領域では27.6%から13.8%に、また「聞くこと」の領域では31.0%から13.8%に減った。これは、実生活の場面や状況を設定した中で言語活動を行い、生徒が既習の単語や知識を活用できるようにして進めてきた成果であると考えられる。さらに毎授業の最初に帯活動を行うことで、英語を話すことに積極的になる生徒が増え、そこから書くことの活動をはじめ、様々な活動へとつなげることができた。

（3）幸高等学校全日制課程普通科1学年での実践

①生徒の実態

6月のアンケートの結果から、「英語で会話できるようになりたい」という生徒が多く、ペア活動や、文法・語彙の授業を好む生徒が多いことが分かった。一方で「英語で会話すること（伝え合う）」「英語で発表する」ことを苦手とする生徒が多いことが分かった。

②実施した統合的な言語活動

○テーマに係る話を聞き、その内容を自分の言葉で相手に伝える活動

⇒「聞くこと」「話すこと」の統合的な言語活動（リテリング活動）

○読んだ内容について話したり、書いたりする活動

⇒「読むこと」「話すこと（発表・やり取り）」「書くこと」の統合的な言語活動



図4 ペアで教え合う様子

③実践例

<科目、単元> コミュニケーション英語 I 「Lesson4 Kawaii and Japanese Pop Culture」

<単元目標>

- ・Eメールで来た学校行事についての質問に対する返信を書くことができる。

- ・日本の文化について自分の考えを述べることができる。
- ・ジャパンエキスポについてのグラフに基づき、説明したり、説明を書いたりすることができる。

<授業展開（第3時）>

- ・帯活動：ペアで会話活動を行う。
- ・導入：日本のキャラクターが世界で活躍している話を聞き、理解する。
- ・展開：教科書の暗唱ではなく、内容を自分の言葉で伝えるリテリング活動（合計2回）を行う。
- ・まとめ：Assessment Sheet を記入し、活動を振り返る。

<活動の様子・生徒の反応>

ペアで行うことで、分からない部分を教え合うことができた。また代表のモデルを聞き、新たな情報や表現方法を取り入ようとする姿が見られた。

表3 単元計画 ※【 】内は統合的言語活動

全時間	帯活動：ペアでの会話活動
第1時	海外でのカワイイという言葉の使われ方や日本のポップカルチャーの説明を読み、概要や要点を捉える。
第2時	It is (was) 形容詞 to~ の不定詞用法を理解する。
第3時 本時	日本のかわいいキャラクターが世界で活躍している話を聞いて、概要や要点をとらえる。その後、リテリング活動を行う。【聞く・話す】
第4時	助動詞の用法を理解する。
第5時	ジャパンエキスポの説明を聞いて、内容を理解する。
第6時	関係代名詞の用法を理解する。
第7時	ジャパンエキスポについてのグラフに基づき、説明文を書いたり話したりする。【読む・話す（やり取り）・書く】
第8時	日本の学校行事に関するEメールでの質問に、英語で自分の意見を伝える。【読む・話す（発表）・書く】

④成果

アンケート結果から、会話ができるようになりたいと回答した生徒が74.4%から84.6%に、スピーチや討論ができるようになりたいと回答した生徒が18.0%から23.1%に増加した。これは、授業の中で、生徒が本文の概要や要旨を的確にとらえ、その内容を自分自身の言葉で相手に伝えることができるようになり、英語でコミュニケーションを図ることへの関心が高まったからだと考えられる。また、帯活動により積み上げられてきた基礎が活かされ始めているように思われる。

（4）橘高等学校全日制課程スポーツ科1学年での実践

①生徒の実態

6月のアンケートから、会話ができるようになりたいという意欲をもっている生徒は多いが、発表することにはあまり関心がなく、発表ができるようになりたいという意欲は低いことがわかった。

②実践した統語的な言語活動

○聞いた内容に対する返信として原稿を書き、それを発表する活動

⇒「聞くこと」「話すこと（発表）」の統合的な言語活動

○読んでリサーチした内容について、それを書いて原稿にまとめる活動

⇒「読むこと」「書くこと」の統合的な言語活動

③実践例

<科目、単元>

コミュニケーション英語Ⅰ 「Lesson 3 Kimonos are cool」

第2回英語プレゼンテーション発表会 『外国の人に日本文化の魅力を紹介しよう』

<単元目標>

- ・日本文化が外国でどのように評価をされているかに関心を持ち、その豊かさについて知る。
- ・日本文化の魅力を他者にわかりやすく伝えることができる。

<授業展開（第5時）>



図5 日本文化紹介ビデオメッセージの様子

- ・帯活動：3分間英会話を行う。
- ・導入：イギリス在住のALTの友人から届いた「日本について教えてほしい」という動画を視聴し、現実的な場面設定と発表への動機づけを行う。
- ・展開：外国の人に紹介したい日本文化の魅力は何かを考える。班毎に分担してリサーチをする。
- ・まとめ：発表を録画してイギリスに送ることを告げ、発表方法での工夫点を考える。

＜活動の様子・生徒の反応＞

生徒から多様な考えが出され、発表方法や資料も工夫されていた。イギリスから届いた感想も興味をもって読んでいた。日本文化の魅力を伝える力は実社会で役立つコミュニケーション能力であることを、生徒は実感できていた。

④成果

12月のアンケートで全ての質問に肯定的な回答の割合が高くなった。特に、「発表する活動」

を面白いと感じた生徒は23%増加し、「発表」をできるようにになりたい生徒は36%増加した。発表する経験を重ね達成感を得ることで、関心・意欲が高まった。

（5）高津高等学校全日制課程普通科2学年での実践

①生徒の実態

6月の実施したアンケート結果より、生徒は、将来英語が必要となると感じており、英語での会話ができるようになりたいという意欲をもっている生徒が多いことが分かった。

②実践した統合的な言語活動

○話し合った内容について書く活動（帯活動）⇒「話すこと」「書くこと」の統合的な言語活動

③実践例

＜科目、単元＞ コミュニケーション英語Ⅱ 「The Only Japanese on the Titanic」

＜単元目標＞

- ・タイタニック号の事件と歴史的背景、さらに、唯一の日本人乗船者である細野氏についての英文を読んだり聞いたりして理解し、自分の感想や意見を表現することができる。

＜授業展開（第3時）＞

- ・帯活動：会話表現の導入→音読練習→今日の表現を使用した自由会話→ライティング・振り返り

- ・展開1：教科書本文に関する課題をグループで取り組んだ後、クラス全体で内容を共有する。

表4 単元計画 ※【 】内は統合的な言語活動

全時間	帯活動：3分間英会話または副教材を利用した表現トレーニング
第1時	ALTが知らない日本文化を班で協力し英語で説明する。
第2～4時	Lesson 3を読み日本の伝統文化である着物について考える。
第5時 本時	日本文化を紹介するプレゼンの作成① 日本の何が外国の人に魅力的かを考えリサーチする。【読む・書く】
第6時	日本文化を紹介するプレゼンの作成②発表原稿作成【読む・書く】
第7時	日本文化を紹介するプレゼンの作成③ スライドなどの資料を作成する。 班毎に発表の仕方を工夫し練習する。【読む・書く・話す（発表）】
第8時	プレゼンテーション本番（ビデオメッセージ録画）【話す（発表）】
第9時	クラス内発表会后、イギリスから届いた感想を読む。各自の振り返りを行う。互いに良い点を指摘し、ALTからもアドバイスを受ける。

表5 単元計画 ※【 】内は統合的な言語活動

全時間	帯活動：導入→音読→自由会話→ライティング・振り返り
第1時	タイタニック号事件について、個人で調査する。
第2時	Part 1の内容と文法をグループ・ペアで確認する。 【読む・話す（やりとり）・書く】
第3時 本時	Part 2の内容と文法をグループ・ペアで確認する。 【読む・話す（やりとり）・書く】
第4時	Part 3の内容と文法をグループ・ペアで確認する。 【読む・話す（やりとり）・書く】
第5時	Part 4の内容と文法をグループ・ペアで確認する。 【読む・話す（やりとり）・書く】
第6時	グループ・ペアで単元まとめの練習問題に取り組む。
第7～8時	タイタニック号事件についての意見や感想を書く。 【話す（やりとり）・書く】

- ・展開2：ペアで文法事項を説明し合って理解を深め、その文法を使って英文を作成する。
- ・展開3：ペアやグループで教科書本文の音読や暗唱をする。

<活動の様子・生徒の反応>

ペアやグループ学習においては、楽しみながら学習に取り組んでいる様子が見られた。さらに主体的に課題などにも取り組む姿勢が見られるようになった。



図6 ペアで活動する様子

④成果

アンケート結果から、5領域のすべてにおいて、生徒の苦手意識の減少が見られた。これはペアやグループでの学習など学習形態を工夫し、生徒が主体的に活動できるよう意識して進めるとともに、毎時間10分間の帯活動で、「話すこと」「書くこと」の統合的な言語活動を行うことにより、コミュニケーションに対する興味・関心の向上に繋がったからだと考えられる。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

様々な領域にまたがる統合的な言語活動を取り入れた授業実践を単元全体で行うことで、2つの成果を得ることができた。1つは、授業の中で実践的なコミュニケーションの場面を作り出し、それをコミュニケーション能力の向上へと結び付けることができたことである。

読んで理解したことを人に伝えたり、聞いたことを書いてまとめたりするといった実際の場面に近い統合的な言語活動を帯活動等で繰り返すことにより、学習した語彙や文法、表現をコミュニケーションの場面で活用することができるようになったと考えられる。もう1つは、英語で発信すること（話すこと・書くこと）に対しての苦手意識が全体的に改善したことである。アンケートの結果にも発信することに苦手意識の低下が表れている。これも、複数の領域を結び付けた実践的な言語活動を帯活動等で繰り返し行うことによって、生徒が英語でのコミュニケーションを楽しみ、自分の考えや気持ちを「伝えたい」と感じるようになり、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されたからだとと思われる。

2 今後の課題

統合的な言語活動は、実践的なコミュニケーション能力へつながるものである一方、その実施には英語を聞いたり読んだりしてその内容を理解する力や、自分の考えを表現するというような基本的な知識・技能が必要とされる。本研究の授業実践においても、基本的な知識や技能が身に付いていないために、意欲は高まったでも実際のコミュニケーションでの活用に至らない生徒も見られた。統合的な言語活動と並行して、帯活動での会話練習などを通じてコミュニケーションの基礎となる知識・技能の育成を実施していくことの重要性を感じた。

また、統合的な言語活動における効果的な場面の設定方法にはさらに工夫が必要であると思われる。場面を工夫することによって、生徒のコミュニケーションへの意欲が高まったという事例にも表れているように、場面の設定方法によって言語活動の効果は大きく変わってくる。引き続き、効果的な場面の設定などについても研究を進めていく必要があると考える。

最後に、研究を進めるにあたり、ご指導、ご助言をいただきました先生方、研究をご支援いただきました所属校の校長先生をはじめとする教職員の皆様に、心からお礼申し上げます。

図7 市立5校 共通アンケートの結果

	6月 (%)	12月 (%)
会話をすることが苦手	74.2	69.6
発表することが苦手	76.0	73.3
書くことが苦手	66.4	65.0